

前田洋平（国際公共政策専攻）が、第十一回松本清張研究奨励事業に入選しました。

この研究奨励事業は、いつも時代と人間存在の深奥を見つめ続けていた松本清張氏の歴史、社会や人間性の深層を探求する精神を継承していくことを目的として創設されたものです。

第十一回松本清張研究奨励事業入選によせて —松本清張氏が描いた強者に潜む弱者の心—

国際公共政策専攻

前田洋平

入選した研究テーマは「松本清張が追い求めたヨーロッパの幻影を求めて—欧州統合運動の隠された一面—」です。日本人とオーストリア人のハーフであるリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーという人物が組織した欧州統合運動に焦点を当てています。

この「パン・ヨーロッパ」と名付けられた欧州統合運動には第二次世界大戦後からウィンストン・チャーチルも積極的に関わることとなりました。

研究では、クーデンホーフとチャーチルの二人の間で交わされた往復書簡を一次史料として使用しています。往復書簡に目を通して行くと、激しい権力闘争から引きつりおろされないように必死にしがみつこうとするかれらの姿が浮かび上がってきます。それは、地位も名誉も獲得し、一見すれば満たされた人生を送っていると思われるような人物であっても、別の側面から観察すれば孤独な闘いを強いられるという現実の皮肉な一面であると捉えることができます。

では、それをいかにして描くのか。考え、悩んでいるときに、松本清張作品に出会いました。清張氏の「強者」の捉え方はとても説得的で参考になるものでした。

たとえば、『カルネアデスの舟板』は強者が持つ弱者の心理を見事に描いた作品です。主人公の大学教授玖村は戦後、左翼的な歴史理論にうまく滑り込み、歴史教科書を執筆するほどの地位を築きます。対照的に戦後学会から追放され、落ちぶれていた指導教授の大鶴を玖村は大学に呼び寄せます。玖村の成功を目の当たりにした大鶴はそれまでの自説を捨て、左翼指向に豹変します。しかし、時代は移り、左翼偏向が糾弾されるようになる中で、玖村は教科書の執筆を続けるために、気づかれぬように「右に帰る」ことを試みます。しかし、大鶴もまた同じことを考えていることを知るので、指導教授と弟子が同じ行動をとることはあまりに目立ちすぎる。玖村の心に大鶴に対する憎悪が芽生えます。

このミステリーには、一度地位を手にした男が、地位を守り抜くために殺人にまで手を

染める過程が描かれています。玖村は、地位を失うことに怯え、寝苦しい夜を過ごし続けます。そこにあるのは、「強者の論理」ではなく、「弱者の心理」です。強者の内には常に弱者の心理があり、それが時には殺人という魔の論理に転じることさえあるのだということを清張氏は教えてくれます。

クーデンホーフやチャーチルをそのような強い弱者という視点から観察することで、欧州統合運動に関する新たな視座を得ることができます。欧州統合という巨大な政治運動のうねりは多くの権力者を巻き込み、かれらに弱者の心理を呼びおこしました。かれらは地位を失わまいと策を練ります。崇高な理念を実現しようと思いつつも、目の前の権力闘争に力をそそぎ、保身に走ってしまう政治家たちの実態が明らかになります。

今日も世界同時不況という巨大なうねりが私たちを呑み込もうとしています。そんな時だからこそ、清張氏の描く人間の本質を見つめ直す必要があるのかもしれない。

最後にもうひとつ、清張氏の特徴を挙げるならば、人の内面を描くことで社会の構造を描くという点です。『カルネアデスの舟板』でも、教授達の内面を描きながら学会や出版界、政界の姿を構造的に浮き彫りにしました。私も、クーデンホーフやチャーチルの内面を描きつつ、欧州統合という政治運動の姿を構造的に捉えればと考えています。

偶然にも今年は松本清張氏生誕 100 年です。この記念すべき年に氏の名前を冠した研究奨励事業に入選できたことをとてもうれしく思います。